

野間五造氏著 立法一元論ヲ讀ム

中 村 彌 三 次

は し が き

制定以來約四十年些ノ修正モ無クシテ今日ニ及ンデキル我憲法が、既ニ其間異常ノ發達ヲ遂ゲ來タツタ實社會ノ現在ノ生活要求ニ應ジ難クナツテキルコトハ、何人モ否定シ得ザル事實デアルト思フ。而モ從來斯カル事實ニ敏感ナルベキ憲法學上ノ論説が、單ニ憲法成文ノ末節ニ拘泥セル蒸返シ的註釋カ、然ラズトスルモ憲法不變ヲ前提トスル因循姑息ノ彌縫的改良論カニ過ギザル爲メ、一般識者ヲシテ憲法學ハ固ヨリ憲法其ノモノニ對シテスラ、甚シク失望ノ感ヲ抱カシメツ、アツタ。此時ニ方ツテ野間五造氏ノ立法一元論出デテ、世人ノ永ク期待シテキタ貴族院廢止問題其他ノ重要ナル憲法改正問題ノ解決セラルベキ方針ヲ公ニスルヤ、世上ノ之レニ對スル興味ハ甚シク刺戟セラレ、憲法再生ノ機運モ頓ニ醸成セラル、コト、ナツタノデアル。

然シナガラ其主張ノ或モノニ就テハ、自分ハ多少見ル所ヲ異ニスルモノガ尠クナイ。敢テ妄評ヲ試ムル所以デアル。但シ本稿ノ目的ハ専ラ同著ノ根本的主張タル立法一元主義・其主張ノ根據・其實行方法ノ如キ大綱ノ紹介及批評ニアルカラ、編述ノ方法・參考資料ノ考證及取扱・用語ノ適否巧拙等ノ如キ技術的方面ニ就テハ、固ヨリ自分モ多少異存ガ無イデハナイガ、茲ニハ其批評ヲ省略スルノ外ナイ。

本評ヲ試ムルニ際シテハ特ニ、野間氏ノ所謂『工場縱覽』ノ意

味ニ於テ、親シク其自宅ニ於テ同著ノ參考資料タル歐米各國ノ名著勞作、本邦ニ於ケル各種各様ノ貴重ナル材料等ノ閱覽ヲ許サレタ著者ノ好意ニ對シ、自分ハ茲ニ一言謝意ヲ述ベムト欲スルモノデアル。

第一項 立法一元主義ノ主張……………2

I. 主張ノ大要——II. 叙上各項ニ對スル批評

第二項 立法一元主義ノ主張ノ根據……………11

I. 萬物歸一ノ哲理——II. 國家一元說及主權不可分ノ原則——III. 朋黨的鬭爭ノ防止——IV. 無意義ナル複院制理論——V. 實行至難ノ社會的院制論——VI. 現行貴族院及樞密院ノ制弊——VII. 普通選舉制度ノ徹底ト貴族院ノ存在——VIII. 責任內閣制ト立法多元主義——IX. 一元主義立法ノ沿革及世界ニ於ケル立法思潮ノ大勢

第三項 立法一元主義實行ノ方法……………29

I. 貴族的階級制度ノ撤廢——II. 憲法ノ改正——III. 貴族院ノ廢止——IV. 樞密院ノ國務參與權ノ剝奪——V. 單一國民院ノ創設

第一項 立法一元主義ノ主張

I. 主張ノ大要

A. 著者ノ所謂立法一元論トハ『是を政治哲學上より觀すれば、立法用具制としての單院論であり、復た夫れを實際の法制上から謂へば、憲法改正を前提としたる貴族院無用と成るのである』^(上卷一頁)。而モ此貴族院無用論タルヤ『全く階級意識の撤廢を前提としたる政治論であつて、貴族院の存在を否認するには階

級打破の論陣より前進せねばならぬ譯である。乃ち階級思想を國民から奪ふた後に非ざれば到底上院撤廢など唱導さる可き者では無い』(下卷二頁^{三頁})。故ニ貴族院無用論ハ其前提ニ於テ貴族無用論デアリ、立法一元論ハ國民一切平等主義ヲ前提トスル民意一元論ニ根據スルモノデ無クレバナラス。但シ著者ノ所謂貴族ナル語ハ皇族ヲ含マザルコトヲ記憶シナクレバナラス(上卷一^{三六頁})。而シテ著者ガ同書上下二卷約千頁ヲ通ジテ終始一貫主唱セラル、所ハ、要スルニ『憲法改正ガ可能性ヲ帶ブル曉ヲ俟ツテ、皇室ノ尊嚴ヲ冒瀆セズ、統治權ヲ戕ハザル範圍ニ於テ我立法機關ヲ改造シ、貴賤貧富無差別ノ單一普遍的ノ國民院ヲ創設セムコトヲ希望ス』ルニアル(上卷三^{二頁})。

B. 然シナガラ若シ野間氏ノ主張ガ叙上ノ如ク單ニ貴族院ノ廢止ニノミ止マツテ自餘ノ立法關係制度ニ及ブ所ナカラムニハ著者ノ立法一元主義ハ遂ニ其實效ヲ期待シ得ベカラザルニ至ルデアラウ。斯カル關係制度ノ中、樞密院ハ其最モ隱然且重大ナル勢力アルモノdeal。サレバ著者モ深ク茲ニ意ヲ致ス所アツテ、我邦ニ於ケル立法體ハ二院制度ニ非ズシテ事實上少クモ三院制度ナルコトヲ指摘シ、立法一元ノ旨趣ヲ徹底セシムル爲メニハ、嘗ニ貴族院ノ廢止ヲ期スルノミニテハ不可ナリ、更ニ現行樞密院官制ノ改革ヲ斷行シ、之ヲシテ現實ノ國家的立法事務ニ容喙スルノ權限ナカシムル必要アルコトヲモ併セテ主張シテキル。

C. 吾人ノ經驗ニ徴シテモ明カナル如ク、我現行議會制度ノ様ニ複院制ヲ採ツテ其上下兩院ニ依ル慎重ノ審議ヲ遂ゲテスラ猶其立法ガ輕卒ニ流レ且議會ノ行動ノ上ニ選舉民ノ眞意ヲ表ハシ得ザルコトガ尠クナイ。故ニ著者ノ主唱セラル、ガ如キ單一議院制議會ノ場合ニ在ツテハ、其弊ガ比較的多カラウコトヲ豫想シナケレバナラヌ。仍テ著者モ此點ニ顧慮スル所アツテ曰ク『吾人の主唱する立法一元主義は、一方に於て貴族院廢止竝に樞密院の刷新を敢行すると同時に、他方に於て議會制度と斯直接立法制の調節を謀らねばならぬ』トシ(下卷四七〇頁)、單一國民院若シ其立法ニ方ツテ輕卒ノ行動ニ出デ選舉民ノ眞意トスル所ヲ代表セザルトキハ、例ヘバ人民投票ノ方法ニ依ツテ其立法ノ是非ヲ選舉民ニ問ハシムベキコトヲ併説シテキル。即チ曰ク『將來に於て庶民院（單一國民院ニモ相當スベキモノナラム）の缺陷を填補修綴すべき機關は貴族立法でも無く、亦た特種階級の再審制度でも無く、畢竟するに一般、平等、祕密の普選式投票制に基く、判決機關に一任せねばならぬので有る。其判決機關として指す可き者は一般投票制、立案投票制、黜陟投票制が夫れである。吾人は斯以上に何物をも需める必要は無い』(上卷二二三頁)。

以上之ヲ要スルニ野間氏ノ主張ニ係ル立法一元主義ハ、一部分比例代表法ヲ加味シタル地域代表・職能代表・階級代表等ヲ基礎トシテ、貴賤貧富無差別ノ單一普遍的ノ國民院ヲ創設シ、之ヲシテ國ノ立法事務ヲ專管セシメ、若シ其議決國民ノ意欲ニ

背馳スト認メラル、時ハ、或特定ノ組織的direct立法ノ方法ヲ以テ其可否ヲ國民ニ問ハシムルコトヲ趣意トシ、此趣意ニ反スル他ノ總テノ機關ノ存在ヲ排斥セムトスルニ在ルモノト解シテ大過アルマイト思フ。

II 叙上各項ニ對スル批評

A. 同書ハ其主ナル題名トシテ立法一元論ト謂ヒ、其副名トシテ貴族院無用論ト謂フ。亦立法一元論ノ語義ニ就テハ既ニ引用セシ如ク是ヲ『政治哲學の上より觀すれば立法用具制としての單院論で有り、復た夫れを實際の法制の上から謂へば………貴族院無用論と成る』トアル。隨テ同著ノ論議全體ガ主トシテ貴族院無用論ノ點ニ集中セラレ、自餘ノ複院制度ノ無用論ニ及ブコト甚薄カリシハ吾人ノ最モ遺憾トスル所デアル。是レ世上ノ評者往々著者ガ此點ニ關シテ全然言及セザリシカノ如ク酷評スル所以デアル。加之、他種ノ複院制度ニ關スル著者ノ論鋒貴族院無用論ニ於ケルガ如ク銳利ナラズ、就中上卷第百八十七頁ニ於テハ『上院を職能代表主義にて固める事の可否が現在の政治問題として頗る興味ある者であつて、甲論乙駁未だ判然たる歸着點に到達して居無い様ではあるが、早晚實施せらるゝ者と見ねばなるまい』トナシ、著者自ラ職能代表式上院制度實現ノ可能性ヲ認ムルガ如キ口吻アリ、亦著者ノ所謂『社會的院制』ニ對スル批評ノ態度往々曖昧ナルガ如キモ、蓋シ種々ノ批評ヲ招ク他ノ有力ナル原因ニ非ザリシヤヲ思フ。

B. 元來立法一元主義ヲ論ズルニハ、先ヅ之ヲ形式的意義ノモノト實質的意義ノモノトニ區別シテ取扱フコトガ便宜デアリ且妥當デアルト思フ。而シテ吾人ガ茲ニ所謂形式的意義ノ立法一元主義トハ、總テ法規ノ制定手續ハ一箇ノ立法機關ノ審議決定ヲ經レバ足り、之ガ再審又ハ三議ノ機關ヲ要セズトナスコトヲ趣意トシ、實質的意義ニ於ケル立法一元主義トハ、總テノ立法事務ハ其種類ノ如何ヲ問ハズ悉ク舉ゲテ之ヲ唯一箇ノ立法機關ヲシテ專管セシムルコトヲ趣意トスルモノデアル。立法多元主義ハ此逆ノ場合ト解スレバ足ル。

仍テ我國ノ現行議會組織ノ如キハ、其ノ種類ノ如何ヲ問ハズ苟モ憲法上立法事項ト規定セラル、モノタル以上ハ凡ベテ之ヲ單一ノ帝國議會ヲシテ專管セシメ、他種ノ立法機關ノ併存ヲ認メザルガ故ニ、實質的意義ニ於テハ一元主義ニ據レルモノト解スベク、又其ノ法律制定手續ハ貴衆兩議院ノ審議ヲ要スルモノ即チ再度ノ審議ヲ經ルヲ要スルモノナルガ故ニ、形式的意義ニ於テハ多元主義ニ據レルモノト解スベキデアラウ。又著者ノ引用セラレタル“Webb”夫妻共著「大英社會主義共和國構成法論」第百十頁以下ニ於テ主張スルガ如キ政治議會及社會議會併設ノ制度ハ、其等兩議會ガ各々其獨自ノ管轄權ヲ有シ、其專屬管轄事務ニ就テハ互ニ他ノ干涉ヲ許サズ、而モ兩院共ニ再審的議院ヲ其上ニ戴カザルヲ以テ、形式的意義ニ於テハ一元主義ニ、實質的意義ニ於テハ多元主義ニ依レルモノト解スベキデア

ル。猶等シク野間氏ノ引用セラレタル“Cole”ノ舊説ニ依レバ一方ニハ消費者側ノ代表者ヲ以テ成ル國家ノ政治議會アリ、他方ニハ生産者側ノ代表者ヲ以テ成ル各種職能議會アリ、更ニ之等兩種ノ議會ノ上部ニハ一個ノ合同議會 (Joint Congress) アリテ立法再審機關タルノ作用ヲ有スベキモノナリシヲ以テ、實質的形式的兩意義ニ於ケル多元主義制度ト謂フベキデアッタと思フ。而シテ野間氏ノ主唱セラル、單一國民院ガ、形式的及實質的兩意義即チ絶對的意義ニ於ケル一元主義タルコトハ何等ノ説明ヲ要セズシテ明デアル。

形式的多元主義及實質的一元主義併用ノ制度ニ就キ、其復審立法機關トシテ貴族院制度ノ採用スベカラズトスル著者ノ説ハ極メテ詳細且明徹デアリ、選舉式及職能代表式上院制ノ採用スベカラズトスル著者ノ説モ稍見ル可キモノアリト雖モ、實質的多元主義及形式的一元主義併用ノ制度ニ就テハ、唯上卷百十九頁註七ニ於テ“Webb”ノ主張ニ係ル制度ノ概要ヲ紹介シタルニ過ギヌ。而シテ“Webb”ノ説ハ野間氏モ既ニ譯述セラレタル如ク、其所謂政治議會及社會議會ノ構成ハ之ヲ職能代表主義ニ據ラシメズシテ却ツテ地域代表主義ニ據ラシムルモノナレバ (A Constitution for Socialist Commonwealth of Great Britain, pp. 116, 120.)、野間氏ガ同卷百二十頁ニ於テ與ヘラレタル如キ職能代表主義實行困難ノ理由ヲ以テシテハ之ヲ否認スルニ足ルマイト思フ。絶對的意義ノ多元主義ニ就テモ、同上註七及上卷十六頁註十九ニ於テ“Cole”ノ説ノ大要ヲ紹介

シ、同百二十頁ニ於テ職能代表主義ノ實行困難ニシテ未ダ實行ノ時期ニ非ズ研究時代ニアリト謂フガ如キ簡單ナル反對理由ヲ述ベタルニ過ギヌ。苟モ著者ガ立法一元主義ノ大則ヲ眞向ニ振翳シテ、政治哲學上ヨリ立法用具制トシテノ單院論ヲ主唱セラル、以上、之等ノ諸制度ニ關スル十全ノ説明ナクテハ叶フマジト思ハレル。

C. 立法一元制度ノ弊害ヲ防止セムガ爲メ直接立法制度ヲ採用スルニ就テハ、茲ニ二箇ノ重大ナ問題ガアル。第一ニハ其レガ我國ノ如キ非人民主權說ヲ取ル國柄ニ於テ、果シテ天皇ノ立法權ト牴觸スル所ナキヤ否ヤノ問題デアル。第二ニハ縱シ如上ノ問題解決セラル、トシテモ、此制度ハ元來代議士ニ依ル間接立法參與制度ニ加ヘテ人民ニ依ル直接立法參與ヲ行ハシムルモノタル關係上、從來ノ上院的復審制ニ代フルニ國民的復審ヲ以テシタルニ過ギザルガ故ニ、立法一元主義ノ原則ハ爲メニ破レテ遂ニ再ビ立法二元主義ニ復元スルノ惧ナキヤ否ヤノ問題デアル。

第一ノ問題ニ就テ著者ハ曰ク『組織的直接立法制度は……合理的、組織的、倫理的、且平和的な事が（歐米諸國ニ於テ實施ノ結果）保證せられ、且つ夫れは完全なる民衆制であつて、然かも議會制に矛盾する者で無く、復た夫は人民合意制であつて、然かも斯の直接立法制は「君主發案主義」「君主裁可主義」に従ふに於て、毫も統治權を戕ふ者に非ず、復た君主政體

に背反する者で無い事が保證せられた』(下卷五頁)ト。恐ラク著者ノ意ハ、人民投票制ニ依ツテ或法案ノ可否ニ就テ人民ノ表示セル意思モ、或ハ人民發案制ニ依ツテ或法律ノ制定ニ就テ人民自ラ提出セル法律案モ、常ニ立法權者タル天皇ノ裁可又ハ可納アリタル時ノミ有效トナルニ過ギザルヲ以テ、『毫も統治權を戕ふ者に非ず』ト解スベキモノ、如クデアル。異論ノ餘地ナシト思フ。

第二ノ問題ニ就テ著者ハ曰ク『元來立法一元主義は議會制度の治下に於てのみ成立する者で、貴族院の廢止、樞密院の刷新と謂ふも、畢竟議會制度を前提としての事であつて、其制度を離れて存立する者で無い、従テ直接立法なる者は立法一元説と相容るゝ事を得ざるのみならず、或る意味に於テ一種の勁敵と認めねばならぬ次第である。然し若し爰に議會制度と直接立法の調節が行はるゝと假定せば、立法一元説の内にも直接立法の一部が調節的に侵入する者と想はねばならぬ』(下卷四頁)ト。『調節的に侵入す』トハ惟フニ、原則上單一國民院ヲシテ國ノ有ラユル立法事務ヲ主管セシメ、唯例外トシテ特ニ重大ナル立法事項ニ就キ又ハ同院ノ立法行爲明カニ民意ニ背反スト認メラル、トキ或特定ノ方法ニ依リ人民ヲシテ或種ノ直接立法行爲ニ出デシメムトスルニ在ルモノ、如ク思ハレル。即チ例外的調節制度ニ過ギズト謂フニアルモノ、如ク、然ラバ吾人モ敢テ異論ヲ挾ム餘地ハ無イ。

D. 最後ニ、著者ハ我邦ニ於ケル第三立法院タル樞密院ノ國家的立法事務干與權ハ之ヲ奪去スルモ、猶同院ハ『(A)君主國に於ける輔弼機關として、帝王の諮詢に應ヘ豫メ啓沃の誠を致シ、「忝シキ諫言」を呈する最高顧問府として其必要を認める。(B) 帝室自治權の範圍に於ける立法行爲の必要、即ち皇室典範に基く特權行使竝に皇室令、登極令等の帝室諸條例の制定、修正、廢止等の諸行爲』ニ協賛セシムル爲メ其存置ヲ必要ト認メ『(C) 政治體の移動性を離れて國家の代表機關として其必要を認める。即ち内閣は興廢常なく、政黨の離合集散と、議會の成立不成立は、朝夕計る可らざる者がある。從て總ての政治機關は變轉極りなき者と思はねばならぬ。然るに國家は常に國際的に不動の體を持續せねばならず、其活動は一瞬時の澁滯を許さぬ。爰に於てか皇室を中心とする國家代表の獨立機關として樞密院の存在を必要とする』(下卷四
五九頁)ト。

然シナガラ (A)ノ事項ガ若シ國務及皇務兩者ニ關スルモノトセバ、前者ニ就テハ國務大臣アリ後者ニ就テハ內大臣アリテ帝王ノ諮詢ニ應ヘ豫メ啓沃ノ誠ヲ致スニ足ルベク、(B)ノ事項ニ就テハ既ニ宮中顧問官ハ固ヨリ歷トセル皇族會議(國務大臣ノ出席シ得ベキ)アリテ、皇室自治立法ニ充分ノ協賛ヲ奉リ得ベク、(C)ノ事項ノ爲メニハ寸時絶ツコト無キ天皇アリ、豈國家代表ノ獨立機關トシテ樞密院ノ如キヲ要セムヤデアル。加之斯クノ如キハ著者ガ既ニ下卷四五九頁前段ニ於テ『吾曹ガ樞密院

の存在を必要なりと説くのは、(A)現實の爲政に交渉を保たぬと謂ふ事……』ヲ以テ一條件トセルニ矛盾スルモノデハ無イカ。蓋シ變轉常ナキ内閣又ハ成否計ル可カラザル議會ニ代ヘテ、樞密院ヲシテ國家代表ノ一機關タラシムルコトハ、現實ノ爲政ニ交渉ヲ保ツコトノ甚シキモノナルヲ以テバアル。著者ノ謂フガ如キ權限アル樞密院タラバ、議會又ハ内閣ノ不成立ヲ奇貨トシテ（又ハ努メテ其不成立ヲ助成シテ）、其間恐ルベキ秕政ヲ施シ得ルノ專制機關ト化スルカ、然ラズシテ議會政治家克ク努メテ斯カル虛隙ヲ生ゼシメザラムニハ、結局無用ノ長物ニ歸スルノ外アルマイ。寧ロ之ヲ全廢スルニ若クハ無イ。

第二項 立法一元主義ノ主張ノ根據

茲ニハ野間氏ガ如何ナル根據ニ立ツテ如上ノ立法一元主義ヲ主張セラル、カヲ檢討シナケレバナラス。而シテ其根據タル理由ハ稍無系統ニ各所ニ散述セラレタルモ、要スルニ以下逐説スベキ九項目ノ外ニ出デスト思フ。

I. 萬物歸一ノ哲理

著者ハ「ヘーゲル」ノ『全キ者ハ一也』ト謂ヘル、或ハ佛家ノ『十方世界歸一體』ト唱ヘル『萬物歸一ノ哲理』ヲ大前提トシ、政治哲學上ノ現象モ亦此一大哲理ノ支配ニ服スベキ一事象ナルコトヲ小前提トシ、以テ立法機關ノ院制問題モ結局一元主義ニ落付カザル可カラザルノ斷案ヲ下シテキル（上卷二七頁—二八頁）。然シ

斯カル大前提ニハ遽ニ賛成シ難イモノガ在ルト思フ。如何トナラバ若シ然カラムニハ立法議院（例ヘバ單一國民院ノ如キ）ヲ設ケ或ハ其調節手段タル人民投票制ノ如キヲ設クルコトスラ、既ニ萬物歸一ノ哲理ニ背離スルノ嫌アルモノト謂フ可ク、仍テ須ク立法行爲ハ天皇一個ノ決スル所ニ委ヌルヲ以テ正理トナスベキヲ以テバアル。更ニ又此哲理ハ之ヲ一般的ニ適用セムカ極メテ不都合ノ結果ヲ生ズル。蓋シ三權分立主義ノ如キ、或ハ行政作用ノ各部門ヲ十數省ノ多キニ細分化セル現情ノ如キハ、明ニ同哲理ノ指向ニ逆行スルノ愚舉ト解シナケレバナラヌカラデアアル。然ルニ著者ハ自ラ『三權分立制の破壊は、聽て議會制度の無用論を呼び起す危険を包含する者と懷はねばならぬ』ト警告セラレ（下卷四頁）、又『比喩へば行政部の八省を十二省にするも宜しい』トアルヲ以テ（上卷二九頁、三〇頁）、之等ノ場合ニハ寧ロ萬物歸一ノ哲理作用セズト謂フベキモノデアラウカ。而モ斯カル例外ニ就テ著者ハ何等說ク所ガ無イ。

吾人ノ信ズル所ニ據レバ『文化ハ分化ヲ意味ス』ルモノ、如ク思ハレル。近代法律文化ハ實ニ組織アル分化作用ノ賜ナリト謂フモ決シテ過言デアアルマイ。絶エザル分化ハ亦生活ノ複雑化ヲ招來スルコト吾人ノ日常生活克ク之ヲ證明シテ餘リアリ、複雑ナル生活ノ雜多ナル法律的要請ハ之レニ精通セル各種各樣ノ職能的専門的機關ヲ以テスルニ非ザレバ、到底之レヲ遺憾ナク實現スルコトノ不可能ナル、亦何等ノ説明ヲ俟タズシテ明カデ

アル。故ニ立法機關ノ構成ハ寧ロ之ヲ職能的ニ多元化スコトコソ、現在及將來ノ生活要求ニ適應スベキモノト信ズル。此事ハ行政各部ガ年ト共ニ益々職能的ニ多元化サレ行ク傾向ニ照シテモ容易ニ推斷シ得ラル、デアラウ。但シ吾人モ著者ノ言ノ如ク立法事務ノ簡陋ヲ圖ル爲メニハ、必ズヤ形式的な一元主義ヲ持スル必要アルコトヲ認ムルモノデアアル。故ニ若シ吾人ヲシテ謂ハシムレバ、立法機關ノ構成ニハ、須ラク形式的な一元主義ト實質的多元主義ヲ併用シ、以テ“Webb”ノ主張ノ如ク各議院ノ分掌事務ニ就テハ、(互ニ相關スル牽連事務ニ非ザル限り)、互ニ相干渉スルコトナク各々獨斷專行セシメ、牽連事務ニ就テハ各院ヨリ選出スル等數ノ協議員ヲシテ商議ノ上決定セシムル制度ヲ最モ妥當ナリト信ズル。直接立法制ヲ併用スベキコトニ就テハ、吾人モ異議ナク著者ノ說ヲ容レムト欲スル者デアアル。

II. 國家一元説及主權不可分ノ原則

著者ハ立法一元論主張ノ第二理由トシテ『神權ト國家ヲ一元ニ認メテ居ル日本、主權不可分ヲ建國ノ基礎トシテ居ル帝國』ニ於テハ、國家多元説ハ立國ノ本領ニ悖ツテ居ル者ト認メネバナラスト述べ(上卷二九頁及下卷五六二頁)、⁽¹⁾「ラスキー」や「ゼームス」の「プラグマチズム」の如き⁽²⁾「コール」や⁽³⁾「ホブソン」の「ギルド・ソーシアリズム」の如き、國家多元説たる「共同主權主義」や「主權同格主義」を我邦ニ適應せしめ得らるゝ者とは懷はぬ、言葉を匡して謂へば多元的國家組織と多元的立法機關は同一地

盤の上に並立するの可能性を有して居るが、多元的國家組織の中に一元的立法機關は存在し得らるゝ者では無い、斯の意味に即し、我國體の本領と我憲法の教權を基礎として、吾曹は飽く迄で國家一元説と立法一元論の合致的完全體の成立を希望する者である』(下卷五、六三頁)ト説イテキル。

主權不可分ハ必ズシモ著者ノ言ノ如ク日本特有ノ國是ニ非ズシテ、主權ガ最高獨立ナル國家ノ意思力ニシテ他ノ如何ナル制約ヲモ受ケザルコトノ必然的の結果デアル。故ニ此點ヨリシテ國家多元説ヲ排斥スルハ全ク意味ヲ成サヌモノト思ハレル。又「ラスキー」「ゼームス」「コール」「ホブスン」等ノ國家多元論者タルコト洵ニ著者ノ言ノ如クナルモ、彼等ノ主張ガ『國家多元論たる共同主權主義や主權同格主義』ナリトハ、吾人ノ容易ニ承服シ得ザル所デアル。蓋シ所謂國家多元論トハ國家ト社會ガ別個ノ存在ナル事實ノ認識ニ出發シテ、國家モ畢竟スルニ社會ノ上ニ存立セル諸他ノ團體（例ヘバ教會・學會・各種職業組合ノ如キ）ト互ニ相併立スル一團體ニ過ギズト做シ、以テ國家即全的社會タルコトヲ主張スル國家一元論ニ對立スル學説デアル。故ニ國家多元論ト謂ハムヨリモ、寧ロ多元主義的國家論トモ謂フ可キモノデアル。然ルニ共同主權主義又ハ同格主權主義トハ叙上ノ如ク社會上相併立セル諸種ノ團體ガ各々自己固有ノ權力ヲ以テ、自己ノ對內的及對外的生活關係ヲ規律シ他ノ團體ノ權力ニ依ル總テノ干涉ヲ排斥スル主義ヲ謂ヒ、以テ單一主權

主義（例ヘバ國家ナル團體ヲシテ自餘ノ諸團體ノ對內的及對外的生活關係ノ全部又ハ一部ヲ統整セシムルガ如キ）ニ對立スルモノデアル。

サレバ一元の乃至多元の國家論ハ國家ノ體成如何ノ問題ヲ取扱ヒ、單一乃至共同主權論ハ國家ノ意思力ノ及ブ限界ヲ取扱フ學說デアル。仍テ兩者ハ全然別箇ノ意義ヲ有スルモノデナケレバナラス。故ニ例ヘバ「ホブスン」ノ如ク國家ノ『體』ノ問題ニ就テハ所謂國家多元論ヲ取ルニ拘ラズ、其『意思力』ノ作用ノ限界問題ニ就テハ、單一主權主義ヲ持スルコトモ亦可能トナル。決シテ著者ノ言ノ如ク只一ト向キニ『國家多元論たる共同主權主義』ト謂フガ如キ命題ヲ生ズベキ性質ノモノデ無イ。サレバ斯カル前提ニ立ツテ『國家一元説と立法一元論との合致的完全體の成立を』結論セラル、ガ如キハ、理論上妥當デ無イト思フ。況ヤ國家一元論ニ基ク單一絕對主權主義スラ、必ズシモ立法機關ノ一元ヲ要求セザルヲヤ。蓋シ其單一絕對ナル主權モ其作用ハ種々ノ機關ノ協同決定ニ俟チ得ベキコト、恰モ單一ナル立法權ノ作用ガ議會ノ議決ト國王又ハ天皇ノ裁可トノ協同行爲ニ俟チ得ルガ如シデアル。

(1) 因ニ謂ヘバらすきハ著者ノ謂ハル、ガ如キ共同主權論者ニ非ズシテ單一主權主義ヲ持スルモノデアル (H. J. Laski's *The State in the New Social Order*, London, 1922, pp. 12-15)。

(2) こゝるモ曾テハ國家ト National Guilds ノ對當主權ヲ認メテ互ニ相侵ス能ハザルモノト做シタルヲ以テ著者ノ言ノ如ク共同主權論者タリシモ (G. D.

H. Cole's *Self-Government in Industry*, London, 1919, pp. 119—131)、其後改説シテ *Guild Socialism Restated*, Chapter VIII “The Working of the Commune”ノ題下ニ於テハ、“National Commune”一個チシテ憲法制定權、憲法解釋權、其他 *Guild Society* 全體ニ關スル諸種ノ對內的及對外的事務ノ處理權ヲ行使セシムルコトヲ主張セルヲ以テ、彼モ今ヤ共同主權論者ニ非ズシテ單一主權論者デアルト思フ。

(3) (ほぶずんモ國家ガ國家以外ノ諸團體ニ對スル統制權アルコトヲ認ムルモノナルヲ以テ、明ニ純乎タル單一主權主義者デアル (S. G. Hobson's *National Guilds, An Inquiry into the Wage System and the Way Out*, London, 1919 pp. 132—133)。

III. 朋黨的鬭爭ノ防止及立法事務ノ簡陟

同種同性ノ二箇體空間ニ於テ相撞着スル時ハ、必ズ其處ニ響ト熱トヲ發生スル、此顯象ハ國家組織ノ上ニ於テモ亦然ルヲ以テ、立法機關ノ複元組織ハ縱シ其等相互ノ間ニ編成及權限上大・小・輕・重ノ差ヲ設ケテ其衝突ヲ緩和セムト企ツルモ、相互ノ衝突ハ遂ニ避ク可カラザル運命デアル。況ヤ斯カル矛盾ノ要素ヲ含ム兩院ヲシテ憲法ノ明文上常ニ兩者ノ一致アル議決ニ出デシメムトスルニ於テヲヤ。如何ナル政治的的技能ヲ以テスルト雖モ、其等兩機關ノ調和アル協同作用ヲ誘導シ得ザル可ク、孰レノ日カ必ラズ兩者ノ衝突・軋轢・杆格ノ結果ニ逢着スルノ外ナシ
(上卷二九一頁—二九二頁) トノ理由ヲ以テ、著者ハ多元的立法組織ヲ不可ナリトシ、朋黨的鬭爭ノ防止及立法事務ノ簡陟上須ラク立法一元主義ヲ採用スベキモノナリト主張シテキル。而シテ著者ハ斯カル兩院衝突ノ史實ヲ内外ノ議會史ヨリ摘出シ來ツテ、其爲メ如

何ニ國家的利益ガ犠牲ニ供セラレ、朋黨の感情乃至利益ノ高調セラレ、國家の立法事務ノ停頓セシメラレタルカヲ具體的ニ證示シテキル。

歐米諸國ノ其レニ就テハ先ヅ之ヲ、(1) 上院ガ下院ヲ壓迫セル時代、(2) 上下兩院妥協ノ時代、(3) 下院ガ上院ヲ征服セル時代トニ三分シテ、各時代ニ就キ詳細實例ヲ舉ゲテ如上ノ事情ヲ説明シ(上卷二九三頁—三六八頁)、我國ノ其レニ就テハ次ノ如キ五箇ノ項目ニ就キ豐富ナル資料ニ依ツテ縷々其レヲ細述シテキル。但シ茲ニハ唯其大要ヲ摘記スルニ止メナケレバナラス。(1) 即チ彼等貴族ガ常ニ我執・尊大・倨傲ニシテ驕慢至ラザルナク、一般社會ノ反感ヲ惹起シ爲メニ階級鬭爭激成セラレ、遂ニ其事象ハ翻ツテ貴衆兩院ノ衝突ニ變形セラル、ニ至リタルコト、(2) 貴族院議員ハ表面堂々國政ヲ論議スルモ事實ハ自己ノ同族ノ利益擁護ノミニ没頭セルコト、(3) 貴族院ノ政治的集團ハ何等ノ主義政見ナク、首領ナク、黨則ナキ『浮浪的衆團』ニ外ナラズシテ唯同族擁護ノ爲メニ苟合セル朋黨ニ過ギザルコト、(4) 創設以來貴族院ガ常ニ一貫シテ「ブルジョア・デモクラシー」ノ排斥ニ終始セシコト、(5) 昨ハ蛇蝎ノ如ク蔑視シタル「ブルジョア」政黨ト今ヤ結托野合シテ彼等ノ政權及利權ノ追求ニ餘念ナキコト等デアル(下卷一—五頁—九九頁)。

固ヨリ反對論者ハ斯カル兩院ノ抗爭(即チ相互牽制ノ結果トシテ生ズル)コソ立憲の議會制度ノ妙用アル所ニシテ、其自由

ナル論争討議ヲ經ルコトニ依ツテ眞ニ民意ノ存在スル所ヲ發見シテ時代相應ノ立法行爲ニ出デシメ得ベク、立法事務ノ遲延ノ如キハ以テ之ヲ補フニ足ルト駁スナラムモ、著者ノ例示セル内外ノ史實ハ、斯カル抗爭ガ常ニ黨派的感情及利益ノ爲メノモノト化シテ、民意ハ無殘ニ蹂躪セラレ國家的利益ノ蔑視セラル、ニ至リシコトヲ雄辯ニ物語ツテキル。

IV. 無意義ナル複院制理論

著者ハ次ニ複院制就中我憲法ニ於ケル貴族院ノ設置理由ヲ、大體下記ノ七項ト見立テ、逐次之ヲ論評シテ其無意義ナルコトヲ述ベテキル。

(1) 君權對民權ノ軋轢アルトキ特ニ君權ノ擁護ニ任ズル者トシテ貴族ヲ社會ノ上部ニ配置シ、且之ヲ以テ貴族院ヲ構成セシメテ所謂皇室ノ藩屏タラシメムトスル說ニ對シテハ、我皇室ハ決シテ貴族團體ノミニ依ツテ擁護セラル、モノニ非ズ、國民全體ノ力ニ依ツテ擁護セラルベキモノデアリ、亦西歐諸國ト異ナリ我國ニ於テハ古來君權民權ノ抗爭アリシコトナキヲ以テ其必要ヲ見ズトナシテ、此說ノ誤謬ナルコトヲ主張シテキル。更ニ又現在ノ貴族ガ平民ニ優リタル忠義心及公共心ヲ有スルヤ否ヤト擲擄一番シテ、悉ク其然ラザルコトヲ具體的事例ニ依ツテ明快ニ證示シテキル（上卷二八〇頁——二一七頁）。

(2) 貴族ヲ根幹トスル上院ノ設置ハ國家ノ政治ニ一箇ノ威嚴ヲ添フル所以也トナス說ニ對シテハ、其レガ今日ノ世態人情ニ

照シテ、甚シキ時代錯誤ノ觀念ナリト主張スル。蓋シ今日ノ貴族ハ漸次政治的ニ否ナ社會的ニスラ、其威嚴ヲ失墜シツ、アルヲ以テバアルトナシ、其實證トシテ彼等ノ醜汚ナル生活ノ事實ヲ一々克明ニ摘示シテキル（上卷二二一頁——二二九頁）。

(3) 政治ノ要諦ハ秉公持平ヲ保ツニアルヲ以テ、之ガ爲メニハ庶民院ノ如ク黨爭ニ與セズ、感情ニ走ラズ、繁忙ニ焦燥セズ經驗老功ノ域ニ在ル君士即チ貴族ヲシテ上院ヲ構成セシメ、以テ政道ノ衡平ヲ維持セシムルモノナリトノ說ニ對シテハ、第一斯クノ如キ制度ハ庶民ノ利益ニ沒交渉ナル貴族院ヲシテ、庶民院ノ立法ガ果シテ黨爭ノ結果又ハ其他ノ不適當ナル行動ノ結果ナリヤ否ヤヲ審議判定セシムルコト、ナリ、少數貴族ノ專制立法ヲ逞ウセシムルコト、ナルヲ以テ、代議政體ノ根本精神ニ反ストシテ之ヲ排斥シ、斯カル審判ハ既述ノ如キ直接立法ノ制ニ依リ人民ヲシテ之ヲ爲サシムルヲ以テ適當トスト主張シテキル（上卷二三二頁——二三四頁）。第二ニ庶民院ガ黨派ノ感情ニ馳セ常規ヲ逸シ易ク朝令暮改ノ立法ニ出ヅルノ弊アリト謂ヘルニ對シテハ、感情ニ支配セラレ黨派心ニ驅ラレ易キコトハ上院モ下院ト何等選ム所ナシト主張シ、東西ノ議會史上ノ事實ヲ以テ之ヲ立證シテキル（上卷二三五頁——二三八頁）。第三ニハ下院議員ハ議員職以外ニ雜多ノ繁職アリ加之下院ノ管轄極メテ多端ナルヲ以テ焦燥立法ニ赴キ易キガ故ニ、恒産アリ恒心アル有閑沈着ノ貴族ヲシテ上院ニ在ラシメ以テ其弊ヲ匡救スルモノナリト謂ヘルニ對シテハ、今日世界

ノ立法思潮ハ勞セズシテ利得スル有閑者ヲ參政ノ範圍外ニ置クニアリ、加之有閑者ノ通弊トシテ遊墮怠慢甚シク銳意國ノ立法事務ニ從フノ熱ナク、而モ自家ノ利得ノ爲メニハ奔命日モ猶之レ足ラズトス、故ニ斯クノ如キ主張ハ明カニ現在ノ立法思潮ノ大勢ニ逆行シ現實ノ事情ニ無智ナル妄説ナルコトヲ以テ答ヘテキル^(上卷二四一頁—二四五頁)。第四ニハ上院ニ下院議員以上ノ經驗老巧ノ士ヲ集メテ國ノ立法ヲ深キ經驗ノ上ニ立タシムトノ謂ニ對シテ著者ハ貴族院ノ構成分子ガ少數勅選議員ヲ除ケバ、他ハ殆ド無經驗ナル未熟ノ愚輩ニ過ギズ、公侯爵議員ノ如キハ僅々二十五歳ニシテ當然議員タルニ非ズヤト反駁シテキル^(上卷二四六頁—二四八頁)。

(4) 上院ニ社會ノ各階級及職能團體ノ代表者タル議員ヲ選出シテ可及的國民全體ノ立法的要求ヲ實現シ、之ニ依ツテ其制定セラレタル法規ニ對スル國民全體ノ信倚及遵奉ノ念慮ヲ招來セムトスルコト亦複院制論者ノ説ク所ナルモ、之ニ對シテ著者ハ上院ニ各種ノ階級及職能ノ代表者ヲ集メテ、其處ニ一種ノ絶對的勢力ヲ醸成セシメ、以テ下院ノ勢力ニ對立セシムルコトハ國民ノ反感ヲ招クモノナリトナシ、殊ニ上院内ニ於ケル各階級及職能團體ノ代表者ハ打ツテ一丸トセバ有力ナルモ、各個孤立セバ頗ル微力ナルモノニ過ギザレバ、庶民階級及庶民の職能團體ニ屬スル代表者ノ多數壓制ヲ招致スルノ惧アリ、果シテ然ラバ他ノ階級及職能團體ニ屬スル者ハ、庶民ノ專制立法ニ屈從ヲ餘儀ナクセラル、ノ惧レナキヲ得ヌ。斯クノ如クムバ多數壓制ノ

弊ヲ防遏シ、萬民ノ法律的信倚ヲ招來スルコトヲ旨趣トスル上院設置ノ目的ニ反スルノ甚シキモノナリトシテ之ヲ否認シテキル（上卷二四九頁——二五一頁）

(5) 下院議員ト類似ノ又ハ其レ以上ノ被選資格ヲ有シテ人民ノ公選ヲ受ケタル議員ヲシテ上院ヲ構成セシメ、以テ上院ヲシテ國民ノ特種意見ヲ代表セシメ且其威重信用ヲ高カラシメムトスル主張（例之、昭和二年十二月四日以降報知新聞所掲）ニ對シテ、著者ハ上卷九十九頁（二）ニ“Bryce”ノ說ヲ引テ反對理由ニ代ヘ『吾人は單式國家の許に於ける上院制なる者は假令夫れが世襲式たると叙任式たると、將た又選舉式たるとに係らず、總ての種別を通じて非認す可き者で』アルト答ヘテキル。（上卷九十九頁）。其

“Bryce”ノ反對理由トハ例ヘバ、(1) 上下兩院議員ノ被選舉資格大差ナキモノタル時ハ、結局兩者共ニ同一多數黨ノ支配ヲ受クルコト、ナリ、爲メニ上院ハ人民ノ特種意見ノ代表機關タラズシテ下院ヲ二分シタルガ如キモノト化シ、(2) 上院議員ノ被選舉資格下院議員ノ其レニ甚シク優ル時ハ、下院議員ノ嫉視ト憤怨ヲ買ヒ兩院間ノ軋轢ヲ來タス惧アリ、(3) 上下兩院議員ノ選舉ヲ同時又ハ接近時ニ於テ施行ストセバ、元來兩院議員ノ所屬黨派略同一ナルヲ以テ、民意ノ代表ハ孰レノ院議ヲ以テ正シトスルヤヲ判斷シ得ザルベク、(4) 更ニ又歐洲大戰後ノ各新興國ニ於ケルガ如ク上下兩院ノ區別ヲ極度ニ其選舉方法ノ上ニ立テムトセバ、上院ニハ老齡ノ富者ノミ聚マリ、下院ニハ壯齡

ノ貧者ノミ集マリ、爲メニ兩院間ニ甚シキ階級鬭爭ヲ惹起シ兩院設置ノ趣意ニ反スト謂フガ如キ之デアル。

(6) 貴族ヲ以テ主要素トナス上院ノ存在ハ拜金主義立法ノ弊ヲ矯ムルノ利アリトスル說ニ對シテハ、著者ハ今日ノ世情トシテ財富ナキ貴族ハ結局貧乏華族トシテ社會一般ノ蔑視ヲ受クルノ外ナク、貴位ト富力ノ結合ニ依ツテノミ世人ノ尊敬モ權勢モ得ラルベキモノニ過ギスト道破シ、而シテ此事情ヲ心得タル貴族ガ、日夜手段ヲ盡シテ利得ノ途ニ腐心シツ、アル實情ヲ赤裸々ニ摘發シ、或ハ子女ヲシテ金策結婚ノ悲運ヲ辿ラシメ或ハ家什賣立ニ依ツテ巨利ヲ博シ或ハ其ノ特權的地位ヲ利用シテ諸種ノ地位及利權ノ涉獵ニ東奔西走シツ、アルコトヲ指摘シテ、彼等ガ決シテ拜金宗ノ防遏ニ役立タザルノミカ、却テ寧ロ之ヲ助長スルノ弊アルコトヲ一々實例ニ依ツテ證示シテキル(上卷二五
二七
一頁)。

(7) 下院ハ民衆の意見ノ代表者ナレバ勢ヒ其立法常識ニ流レ、衆愚ノ立法ニ墮スルノ弊アルベキガ故ニ、少數賢良ノ人士ヲ舉ゲテ上院ヲ組織セシメ以テ其弊ヲ匡救セシムルノ必要アリトスル說ニ對シテハ、著者ハ一般的理由トシテ佛國ノ複院制ヲ實例ニ取り若シ同國ノ如ク上院優秀ナルトキハ國民ノ信倚之ニ傾注シ下院ハ爲メニ輕卒無責任ノ立法ニ流レ易キヲ理由トシテ、結局上院優秀ナレバ下院ノ要ナシ(其逆モ亦眞ナリ)トノ結論ヲ以テ答ヘテキル。又我貴族院制度ニ就テハ少數勅選議員ノ外

殆ド政治的ニ無智ノ人多ク、其立法能力却テ下院議員ノ其レニ劣レルモノ多シト答ヘテキル（上卷二七五頁——二八九頁）。

V. 實行至難ノ社會的院制論

職能代表主義ニ依立スル實質的意義ノ複院制度ニ就テハ、既ニ一言シタル如ク著者ノ態度極メテ曖昧デアル。其否認理由ト認メラル、モノハ第三篇第二章『社會的院制論』ノ中ニ之ヲ見出シ得ル。即チ同章ニ於テ著者ハ所謂社會的院制トシテ、部落代表機關タル保甲會及部落民總會ト職能代表機關タル經濟會議ギルド組織ノ職能議會及トレード・ユニオン議會等ヲ舉ゲテ、（部落代表機關タルモノニ就テノ採否理由ハ示サレザルモ）、職能代表機關タルモノニ就テハ『當世政治哲學上の流行であるが、却て實際に之を施行すると云ふ事は又中々の困難である。理論上に於て職能、業務の上に基礎を置く立法體を製造すると謂ふのは容易の様であるが、夫れが實行に着手すると種々の難事に遭遇する譯である』トシテ之ガ採容ヲ拒ムデキル（上卷一〇頁）。其實行困難ノ理由トシテ例ヘバ同一人ガ二以上ノ職能團體ニ所屬スル場合ニ於テハ、其者ニ對シ二重又ハ其以上ノ投票權若ハ代表權ヲ與フベキヤ、亦此職能的選舉人ノ名簿ヲ作成スルニハ何ヲ以テ其標準トスベキヤ等ノ問題ヲ提出セラレタルモ、法律ノ規定ヲ以テ若シ一人一票主義ノ原則ヲ立テ、二若ハ其レ以上ノ職能團體ニ屬スル者ハ其自由意思ニ依リ選舉目的上孰レノ團體ニ屬スベキカヲ選擇セシムルガ如キ方法ヲ採ラバ如何？其他ノ

點ニ就テ著者ハ『調べれば調べる程幾多の難問が湧出して來る次第で在つて、現在は先づ實行の時機には非ず研究の時代であると斷ぜねばならぬ』トアルノミ。然シ著者ハ其レガ如何ナル難問ナルカヲ示シテ居ラス。立法一元主義ヲ確立スル爲メニハ此難問ヲモ充分研究解決スル所ガ無ケレバナラス。唯實行困難ト謂フガ如キハ其否認理由トナスニ足ラヌト思フ。蓋シ如何ナル制度ニモ實行上ノ困難ハ免ルベカラザル所ナルヲ以テバアル。

加之、著者ハ既ニ新獨逸憲法上ノ一機關トナレル地方及國經濟會議 (Die Bezirkswirtschaftsräte und der Reichswirtschaftsrat Art. 165) ノ如キ職能代表制議會ニ就テハ、『現在或は近き將來に於て各種職能團體の利害を統轄する所の代表機關、例へば「經濟最高會議」の如き者の設置を餘儀なくする者と思はねばならぬ。……………今後の政治なる者は抽象的權利義務の概念から離れ、總て實際的國民の生活に即して惹起さるゝ諸問題の解決を先決問題とせねばならぬ時代に推移しつつあるのである。經濟議會なる者は全く夫等世相の反影である』(上卷一頁)ト述べ、トレード・ユニオン議會制度ニ就テハ新獨逸憲法第百六十五條ヲ引テ、『勞働組合の地方産業組合(地方勞働者會議 “Bezirksarbeiterrat” ナラム)は縣制市町村制といふ政治團を凌駕する權力が附與せられ、從來の立憲制の慣例たる地域代表主義を廢し職能主義に即したる第三院を形成するに至つて居るのである』(上卷二三頁)

一頁) ト述ベテキル。然ラバ著者ハ政治的院制ニ對スル序言ニ於テ實行困難ノ理由ノ下ニ其採用ヲ拒ミタル職能代表制議會ノ存在意義ヲ確認シ、『其採用を餘儀なくせらるゝ者と思はねばならぬ』ト豫言セル者ト謂ハナケレバナラス。此確認ト豫言アルニ拘ラズ同制度ノ基調タル職能代表主義ガ『調べれば調べるほど種々の難問を湧出し其の實行は困難である。……………現在は先づ實行の時機には非ず研究の時代である』ト述ブルガ如キハ、彼此矛盾ノ嫌ナキヲ得ヌ。

VI. 現行貴族院及樞密院ノ制弊

茲ニ所謂現行貴族院及樞密院ノ制弊トハ、著者ガ之等兩院ノ制度ノ固有シ又ハ附隨スル弊害トシテ指摘シ、其レガ爲メニモ之等兩制度ノ撤廢又ハ大改革ノ止ム可カラザル所以ヲ明示セムトセル所ノモノデアル。但多クハ既述複院制理論排撃ノ理由ニ於テ述ブル所ト重複スルモノ多キヲ以テ茲ニハ唯其概要ヲ紹介スルニ止メル。

A. 貴族院ニ就テ、先ヅ第一ニ同院ハ其成立ノ基礎極メテ不公正ナルコトヲ述べ、例ヘバ其議員中武勳貴族トモ目サレ得ベキ者ハ唯舊幕時代ニ於テ大名タリシ故ヲ以テ授爵セラレタルニ過ギザレバ、多クハ功無クシテ不當ノ恩賞ヲ享有シ而モ其當然ノ結果トシテ貴族院議員(世襲的又ハ互選的ニ)タルノ特權ヲ享有スルガ如キ、文勳貴族トモ稱スベキ者ハ素極メテ卑賤ナル職業ニ在リシニモ拘ラズ、斯クモ高貴ナル榮譽ト貴族院議員タ

ルノ特權ヲ擁スルガ如キ、明治維新ニ際シ又ハ其後ニ於テ國家ニ勳勞アリシ故ヲ以テ新ニ授爵セラレタル貴族モ多クハ藩閥者ノ不公平ナル御手盛ノ結果斯カル特權ヲ享有スルニ至リタルガ如キ、終身勅選議員ト雖モ多ク政黨又ハ官僚ノ徒ノ偏頗ナル私心ニ依ツテ奏請セラレ叙任セラレタル者ニ過ギザルガ如キ之デアルトスル。其他ノ有期勅選議員ノ如キモ著者ノ考ル所ニ依レバ結局農業資本金家又ハ御用學者偏重ノ公選方法ニ據ルモノナレバ、實ニ無產者側ニ對シテ不公平ノ制度タルノミナラズ、更ニ商工業資本金家・一般ノ學者・技術家等トノ間ノ問題トシテモ甚ダ不公平ノ制度タルコト明カデアル。更ニ又著者ハ貴族院ニ於ケル伯子男議員ノ互選行爲ガ衆議院議員ノ選舉ト異ナリ總テノ行政監督及司法的統制ヨリ自由デアリ、其他貴族院ガ無解散ノ特權ヲ始トシ豫算審議期間無制限ノ特權・天皇ノ諮詢ニ應フルノ特權・同院構成法ニ就テハ他院ノ容喙ヲ排斥シ得ルノ特權ヲ保持セルコト等ヲ指摘シテ、之等ガ總テ從來貴族院ヲ政治的墮落ト立法的專制トニ導キタル有力ノ原因ナルコトヲ證示シテキル（上卷一三三頁——一九九頁）
及三〇二頁——三〇三頁）。

B. 樞密院ニ關スルモノ、著者ハ此樞密院官制ノ弊害タル所以ヲ述ベテ曰ク『我邦の立法上の第三院（樞密院）なる者は他の二個院に比較して、多量の特權と特種の職能を保有して居る計りで無く、猶ほ立法・行政・司法の三大權を掌握して居る譯である。……………斯の三權混用の政治作用は、我帝國內に於け

る政治權の最も優越なる者であつて、若し各法令の解釋を積極的廣義に爲す場合には、恰も内閣の上に内閣を累ね、議會の上に議會を重ねるが如き結果を招來し、我立憲政をして一種の專制主義に化せしむる者であつて、全く我憲法の基礎を破壊せしむる恐れが含まれて居るのである。……我邦に於て樞密院の存在して居る間、民權の伸張も社會主義の適用も絶対に出來ぬといふ事に成るのである』(下卷四四三頁—四四七頁)ト。而シテ從來我樞密院ガ種々僭越ノ行爲ニ出デタル爲メ、著者ノ憂フル此弊毒ガ如何ニ甚シク我政治過程ヲ濁流シ及現ニシツ、アルカヲ史實ニ依ツテ例證シ、以テ其國政容喙ノ權力ヲ奪去スベキ必要アルコトヲ力説シテキル。

VII. 普通選舉制度ノ徹底ト貴族院ノ存在

此點ニ關シテ著者ハ『今日我國民の期待して居る普選實行を以て完全なる輿論政治を布こふと謂ふ希望は、悲む可き違算と謂はねばなるまい。權利の上に於ての高級院、法制の上に於ての再審院たる貴族院が存在して居る限り、決して國民多數の意思に倚る政治が行はれる者では無い』ト謂ヒ(上卷六頁)、縦シ其レニ多少ノ改良ヲ施シテ之ヲ將來ニ維持セムトスルモ、斯カル世襲貴族及叙任議員ヲ以テ基本的成分トスル貴族院ガ、今後普通選舉ニ依ツテ成立スベキ衆議院ト克ク調和ヲ保持シテ立法事務ニ當リ得ルトハ想像シ難ク、兩者ノ軋轢杆格ハ數ノ免レザル所ニシテ、其爭ハ孰レカノ一方ガ無用ノ長物ト化シ去ルノ曉ニ於

テノミ熄止スベキモノデアルト斷ジ、而モ斯カル争鬭ハ國家及國民ノ兩者ニ對シテ忍ブベカラザル惡結果ヲ招來スルニ至ルノ外ナシト警告シテキル（上卷五頁——六頁）。故ニ著者ニ依レバ普通選舉制ハ其徹底の實行ヲ期スベキ前提條件トシテ必ズ先ヅ貴族院ノ全廢ヲ必要トスルモノナルベク、若シ然ラズシテ此前提條件實現セラレズトスルモ早晚此普通選舉制度ガ徹底的ニ貫行セラレシ曉ニ於テハ、遂ニ同院ノ亡滅ヲ來タスコト、ナルノデアル。

VIII. 責任内閣制ト立法多元主義

此點ニ就テハ著者自身直接ノ説明ナキモ、「マツクベーン」及「ロジャーズ」共著『歐洲諸國新憲法』（pp. 40—41）ノ說ヲ引テ、今日ノ如キ責任内閣制度ノ下ニ於ケル國務大臣ガ二個ノ同格ナル議院ニ向ツテ各々一様ノ責ニ任ズルコトハ、到底行ハレ得ザル煩瑣ノ制度デアル。一内閣ガ同時ニ二人ノ主ニ仕フルコト不可能ナリトシテ、責任内閣制度ノ眞ノ妙用ハ單院議會制度ノ下ニ於テノミ實現セラレ得ベキコトヲ述ベテキル（上卷一三頁——四頁）。

IX. 一元主義立法ノ沿革及世界ニ於ケル立法思潮ノ大勢

先ヅ我國ニ於ケル立法一元主義ニ基ク立法ノ沿革ヲ尋ネテ著者ハ、明治三年開設ノ公議所（翌四年集議院ト改稱）ヲ以テ我國ニ於ケル代議式輿論政治ノ嚆矢ニシテ復タ一元的議院制ノ濫觴ト看做シ、明治七年ノ地方官會議亦一元式立法議會ナルコトヲ指摘シテ、我國ト雖モ決シテ先例ナキ立法主義ニ非ザルコトヲ證示シ（上卷三四頁——三六頁）、次ニハ我國ニ於ケル立法一元主義ノ學說

及政治の主張ノ述ヲ釋ネテ、明治七年太政官ニ提出セシ副島種臣・板垣退助等八名連署ノ「民選議院設立建白書」ノ單院論、明治十二年全國二十二縣人民總代河野廣中等ガ提出シタル「國會建白書」、同十二年岡山縣有志西穀一等ノ提出シタル「民選議院設置願望書」等ノ單院論、土佐ノ立志社・大阪ノ愛國社等各地方ニ散在スル政黨政派ノ宣言書ニ於ケル單院主義、木戸孝允・大隈重信・山田顯義等當時廟堂ニ在リシ大官連ノ單院論、神田孝平・加藤弘之・森有禮等ノ單院論ヲ援用シ來タツテ、著者ノ所謂立法一元主義ノ歴史的背景ヲ光彩アラシメテキル（上卷三九四頁——四四頁）。猶茲ニ、著者ト略同様ノ見解ニ立チ立法一元主義ヲ不言ノ前提トシテ、貴族院ノ廢止ヲ主唱シタル先覺者トシテ、安部磯雄氏ノアルコトヲ附言シナケレバナラス。而モ其提唱ノ時タルヤ明治三十四年即チ我國ニ於テハ憲法上立法多元主義ノ大則確然タル當時ニ於テバアツタ。詳細ハ同三十四年五月二十四日ノ『勞働世界』第七十九號及改造社ノ『社會科學』昭和三年二月特輯號七四——七九頁參照。

最後ニ著者ハ歐米諸國ニ於ケル一元主義立法ノ沿革ヲモ遠ク「ギリシキ」「ローマ」ノ往時ニマデ遡リツ、詳細史實ヲ紹介セラレ（上卷七九頁——九〇頁）、殊ニ歐洲大戰前後ニ於ケル世界各國ノ立法例ヲ引テ、或ハ形式的ニハ複院制タルモ實質的ニハ單院制トナリタル「チエッコ・スロヴァキア」、「ルーマニア」、和蘭、諾威、加太陀、「ポーランド」、英國、獨逸、露西亞ノ如キ、或ハ完全ナル

單院制ヲ採用セル土耳其、希臘、「フィンランド」「セルビヤ」「ユーゴ・スラヴ・ア」「ブルガリア」「ルクセンブルグ」「エストニア」等ノ如キ、大小幾多ノ國ガ漸次單院主義ニ赴クノ傾向アルコトヲ統計學的正確サヲ以テ證示シ、我國亦其思潮ノ外ニ立ツ能ハザルベキヲ斷ジテキル（上卷^{八七頁}——^{九〇頁}）。

第三項 立法一元主義實行ノ方法

如何ナル名案モ其實行ニ良法ヲ得ザレバ結局一個ノ畫餅ニ歸スルノ外ナイ。著者ハ是ニ見ル所アツテ其方法論ニハ可成リノ努力ヲ費サレ、殊ニ立法一元主義實行ノ前提的要件タル貴族階級制度ノ撤廢論及憲法改正論ノ如キニ至リテハ、從來世人ガ謂ハントシテ謂フ能ハザリシ要點ヲ極メテ大膽且率直ニ代辯サレテキル。紙數ニ限リアル本稿ニ於テハ其詳細ヲ盡シテ紹介シ論評スルコト到底不可能デアル。大要ニ止ムルノ外ナイ。便宜上貴族的階級制撤廢論及憲法改正論ヲ當初ニ述べ、次ニ貴族院廢止ノ方法・樞密院ノ國務參與權剝奪案・單一國民院設置案等ヲ紹介シ之ガ簡單ナル批評ヲ試ムルコト、シヨウ。

I. 貴族的階級制度ノ撤廢

『言ふ迄も無く貴族院無用論なる者は、全く階級意識の撤廢を前提としたる政治論であつて、貴族院の存在を否認するには、階級打破の論陣より前進せねばならぬ譯である』（下卷^{二頁}——^{三頁}）。仍テ著者ハ『貴族院總攻撃の前衛戰として、階級の迷信、階級の

執着に向つて開戦の進軍喇叭を吹奏せんとするのである』(上巻)
故ニ此ノ目的ノ爲メニ下巻第一頁ヨリ第二八八頁ガ費サレテキ
ル。即チ階級觀念ト上院ノ關係ヲ主題トスル第七編ニ於テハ、
階級發生原因・階級ノ種別・日本現代之階級・階級打破・階級
ノ容認等ニ就テ論ジ、世襲制度ト上院制トノ關係ヲ論ズル第九
編ニ於テハ遺傳論・世襲法權論・世襲財産論ノ諸項目ヲ取扱ヒ
第八編ニ於テハ既ニ引用シタルガ如キ我貴族院ガ第七及第九編
ニ述ブルガ如キ特權的地位ヲ利用シテ如何ニ横暴ノ限リヲ盡シ
タルカヲ沿革的ニ詳述シテキル。論點極メテ多岐ニ互ルモ畢竟
スルニ其要點トスル所ハ、我明治維新ノ革命ニ際シテ一度ビ四
民平等ノ大原則樹立セラレタルニ拘ラズ、中頃ニ及ムデ反動的
官僚主義ノ擡頭ニ依ツテ不合理ナル世襲的貴族制度ヲ設置スル
ニ至リ、更ニ此不合理ニ加ヘテ斯カル貴族ニ過大ナル參政上ノ
特權(元來貴族的榮譽權ト參政權トハ全然分離シテ取扱ハルベ
キ性質ノモノタルニ拘ラズ)ヲ附與スルガ如キ不公正ノ立法政
策ニ出デ、爲メニ一面既述ノ如キ貴族ノ政治的墮落ヲ招致シ、
他面ニハ榮譽的地位ノ固定ト共ニ人心鼓舞ノ機會ナク、爲メニ
小ニシテハ國民ノ、大ニシテハ國家ノ意氣ヲシテ鎮沈セシムル
ガ如キ結果トナルノ外ナカツタ。故ニ斯カル惡制ヲ芥除シテ政
治ノ廓清ヲ期シ及此沈衰セル人心ヲ興起スルノ意味ニ於テモ、
世襲的貴族制度ノ撤廢ト之ヲ基調トセル貴族院ノ全廢ヲ斷行ス
ルノ必要アリト謂フニ盡クルモノト思フ。唯然リト賛スルノ外

ナカラウ。然シ貴族制度及其レニ依立スル貴族院制度ノ弊害アル故ヲ以テ其全廢ヲ主張スル著者ノ理論ハ、衆議院ニ於ケル「ブルジョア」的政黨者流ノ政治的行動稍モスレバ不節制・不道德ニ陥リ不公平ニ流レ、其立法活動ニ於ケル有産階級的の弊害日ニ募リツ、アル今日、世人ハ直ニ取テ以テ之ヲ「ブルジョア」階級ノ撤廢論及衆議院無用論ニモ適用スベキモノタルコトヲ思フデアラウ。

II. 憲法ノ改正

我邦ニ於テ著者ノ主張ニ係ルガ如キ立法一元主義ヲ實行スル爲メニハ、其前提トシテ憲法ノ改正ヲ經ナケレバナラス。蓋シ我憲法ハ其第三十三條ヲ以テ立法機關ノ構成ニ複元主義ヲ採用セルヲ以テバアル。而モ此憲法改正タルヤ極メテ困難ノ事業ニ屬スル。如何トナラバ當ニ其改正手續甚ダ嚴格タルノミナラズ更ニハ憲法前文ニ『朕カ子孫及臣民ハ敢テ之カ紛更ヲ試ミルコトヲ得サルヘシ』トアル旨趣ヲ世人多ク誤解シテ、紛更即チ濫改ニ非ザル、換言スレバ時宜ニ適セル改正ヲモ許サル千古不磨ノ大典ナルカノ如ク思ヒ倣ス爲メ、其改正ノ主張ハ固ヨリ其研究の論議ヲモ敬遠シテ、之ガ改正ノ機運ヲ醸成シ難キヲ以テバアル。

サレバ著者ハ斯カル世人ノ誤解ヲ去リ却ツテ憲法改正ノ論議及主張コソ憲法自體ノ眞ノ擁護タル所以ヲ明カナラシメム爲メ特ニ憲法進化論・日本憲法ノ醇化・文化生活ニ即スル憲法改正・

日本憲法ノ新教權(新原理ノ意ナラム)等ノ諸章ヲ設ケテ詳説細述之レ努メテキル。而シテ其大要ヲ約言セバ、憲法ハ生物ニシテ變化スル、即チ國家社會ガ瞬時モ流動シテ止マザルヲ以テ其規範タル憲法ノ變化亦避ク可カラザル運命デアル。固ヨリ我欽定憲法ノ神聖ニシテ侵犯ス可カラザルコト勿論ナルガ、同時ニ國民ハ其生育ト活動ヲモ保護シ助成スルノ義務アルモノデアル。蓋シ憲法ハ常ニ其尊嚴ヲ維持セムガ爲メニ之ヲ『神棚に祀り込んで置く可き性質の者では無い。憲法は護符では無い。又た偶像でも無いし、祕法でも無い。憲法は吾人の上に有ると同時に吾人の間に又た吾人と俱に在る者である』カラデアル(下卷三五—三五七頁)。而モ我憲法タルヤ制定以來四十年未ダ曾テ一度ノ修正スラナク、『専ら守株膠着にのみ昐めて居るので、其結果世運の進歩は憲法の上を飛び越えて、遙かに前方に伸展して居る始末である。元來に於て國家の基礎法が世相の進歩に伴はぬと謂ふ事は其國家の發達を阻碍するのみならず一種の危險を包含して居る次第とも見えるのである』(下卷四二二頁)。サレバ斯カル現在ノ情勢ニ校ヘテ憲法改正ノ事ヲ論議シ、以テ憲法ヲ世相ノ進歩ニ順應セシムルコトハ、一方ニ於テハ憲法ニ對スル紛更ヲ防遏スルコト、ナリ、他方ニ於テハ國憲其ノモノ、尊嚴ヲ益々高大ナラシムル所以デアルト主張シテキル(下卷四六一頁)。著者ノ憲法改正論ハ從來我國ノ憲法學ノ最モ乏シカリシ部分ヲ充タス貴重ノ勞作デアル。我憲法學ハ著者ノ此論議ニ對シテ永ク記憶スル所ガナケレ

バナラス。

III. 貴族院ノ廢止

著者ハ『世に貴族院改造問題なる者が有る、夫は微溫的な院制問題であつて外貌の變更、態度の更改、構成分子の取替へ等を主唱するのであるが、孰れも五十歩百歩の者で、一種政治的玩具とも見える。「貴族院ハ改善ス可キ場合ニハ非ズシテ斷然廢止ス可キ時機ニ到達シテ居ル」のであると承知せねばならぬ』トシテ(下卷五五三頁)、世上傳ヘラル、諸種ノ貴族院改革案ヲ紙上ニ埒シ來リ、結局其等ハ『奸黠なる貴族院と怯懦にして彌縫的なる政府者や民間の改革論者等が一時を糊塗する目的を以て、瞬昧にして苟儉的なる改革案を作成し、輿論の銳鋒を避くる事を勗めんとする』モノナルモ、一種ノ喜劇、恐ル可キ結果ニ至ル悲喜劇ニ過ギズト喝破シテキル(下卷二八九頁——三二二頁)。

著者ハ何ヨリモ先ヅ其主張ガ統治權ヲ戕フコトヲ憂慮スル。然シ『法制上の複院制を單院制に變更するは……………唯政體中の一機關の變換であつて國體の基礎と何等の交渉を有する者では無い。貴族院を廢止して衆議院に合併せしむればとて、立國の根幹や統治權の土臺に何等痛痒を感じる者では無い』ト斷ツテキル(上卷二九頁——下卷五五三頁)。

著者ガ貴族院廢止ノ方法トシテ示ス具體案ハ下記四種デアル。即チ (1) 我國ノ院制ヲ憲法上純然タル單院制ト化スル爲メ徹底的ニ貴族院ヲ廢止スル方法アリ、(2) 或ハ現在ノ院制ハ其

儘トシテ唯貴族院ノ權限ヲ縮少シ、以テ事實上ノ一院制ヲ實施スルノ方法アリ、(3) 或ハ緊要ナル國務ヲ全部、貴衆兩院ノ聯合會(所謂帝國議會)ニ移管スル方法、即チ諾威議會ノ如ク上下兩院ノ議員數ヲ上院五十人下院百人位ノ割合ト爲シ、豫算案又ハ外交事務ノ如キ重大ノ國務ハ多ク兩院聯合會ノ議決ニ附シ、以テ多數ノ議員ヲ擁スル下院ノ支配ヲ確保セムトスル案アリ、(4) 或ハ貴族院及衆議院ノ職能ヲ定メテ例ヘバ宣戰講和ノ諮詢條約事項・豫算案ノ如キ重要事項ノ議決ハ之ヲ後者ニ委シ、宮廷事項・慈善業務・社會政策・地方自治問題・衛生事務等ノ事項ハ之ヲ前者ノ管轄ニ屬セシメ、以テ貴族院ノ職能ヲ制限シ政治的ニ單院制ヲ布ク方法モアリ得ルト(下卷四六一頁—四六三頁)。

然シナガラ著者ハ其孰レヲ採用スベキカニ就キ何等ノ斷定ヲ下サズ、唯其最モ注意スベキ立法資料トシテ第三案ニ類似セル諾威議會制度ヲ紹介スルニ過ギヌ(下卷四六三頁—四六七頁)。既述ノ如ク單一國民院ノ創設ヲ主唱シ及後述ノ如ク(簡單ニハアレド)所謂單一國民院創立案(下卷五六七頁—五六八頁)ヲモ提示セル著者トシテハ、惟フニ上掲第一案ヲ支持セラル、モノト推察サレル。

IV. 樞密院ノ國務參與權ノ剝奪

樞密院ノ國務參與權ヲ奪去スルコトガ統治權ヲ戕フモノニ非ザルコトハ、貴族院廢止ガ然ラザルコトヲ以テ著者ハ推斷スルモノ、如クデアル。著者ガ樞密院官制ノ全廢ヲ唱ヘズシテ、唯其國家ノ立法事務及其他ノ國務ニ關シテ、容喙スルノ權ヲ奪去

セムトスルニ過ギザルコトハ既ニ之ヲ述ベタ。其官制改修案トシテ示ス所ニ依レバ、(1) 憲法及憲法附屬法ノ最高審判權（最高解釋權ノ意カ？）ヲ大審院内ニ設置スル憲法裁判所ニ移ス事、(2) 條約及ビ議定書ノ審議權ヲ帝國議會（單院制）ニ移ス事、(3)（爲政ニ絶對干與セザル事、(4) 顧問官ハ特設推薦機關ノ擡舉セル候補者中ヨリ撰拔親任セラル可キ事等デアル（下卷五
六六頁）。斯カル改修案ノ可否ハ既ニ第一項 II, D ノ條下ニ之ヲ述ベタ。

V. 單一國民院ノ創設

最後ニ著者ハ『國民の普遍的意思を網羅したる完全立法體を作らん』ガ爲メ、其構成分子ヲ (1) 普通選舉制ニ依ツテ選出セラレタル地域代表ノ代議士、(2) 各種職能代表ノ代議士、(3) 各種階級代表ノ代議士、(4) 比例代表法ニ依ル地域・職能・階級ノ「少數者」代表ノ代議士ノ四種トシ、之等ヲシテ一箇ノ立法機關、國民院ヲ組織セシムベキコトヲ提議シテキル（下卷五
六六頁）。猶著者ハ其單一國民院ノ名義ニ就キ提案シテ曰ク、或ハ『憲法上ニ於ケル「貴族院」ナル文字ヲ削除シ、「帝國議會」ト謂フ文字ヲ悉ク「衆議院」ト改竄スルカ、若ハ「貴族院、衆議院」ト云フ文字ヲ總テ「帝國議會」ト改メ、以テ名實共ニ純然タル單院制』トシテ表示スベシト（下卷五
六七頁）。

終リニ猶一言ヲ要スルハ著者ガ此單一國民院ニ可及的國民ノ普遍的意思ヲ顯現セムガ爲メニハ、『「マルキシズム」ノ唱導スル

ハ須ラク『貴族モ來ル可シ平民モ容ル可シ、資本家モ宜シイ無
産者モ結構ト云』ツテキルコトデアル(上卷三〇頁及
下卷五六四頁)。然シ既ニ
貴族院廢止ノ前提條件トシテ貴族『階級打破の論陣』ヨリ進軍
セル著者ガ、茲ニ到ツテ『貴族モ來ル可シ』ト謂フガ如キハ彼
此矛盾スルモノト謂ハナケレバナラヌ。

以上之ヲ要スルニ野間氏ノ立法一元論ハ、固ヨリ其論議ノ對
象稍一方ニ偏リ、所說論理的ニ多少ノ矛盾ナシトセズ、編述ノ
手法十全ナリト謂フ能ハズ、用語ノ正確ナラザルモ亦之レ無シ
トセザルモ、著者ガ日常極メテ繁忙ノ生活裡ニ在リテ其片々ノ
閑暇ヲ利用セラレナガラ、斯カル斬新且取扱至難ノ論題ヲ斯ク
モ豊富ナル資料ニ就キ、斯クモ廣汎ナル論據ノ上ニ立ツテ究明
セラレシ功績ハ、洵ニ偉也ト謂フベク快也ト謂フベキモノデア
ル。